

エートス・プロジェクトとは何か

これまで見たように、政府・自民党政権、原子力規制委員会がなぜ、本来人が住んではいけなような、高い汚染を示している地域に住民の帰還を促しているのか、また ICRP は、ICRP 実効線量によっても公衆の被曝線量上限 1mSv と定めている彼ら自身のリスクモデルをわざわざ壊して、苛酷な原発事故時は「緊急被曝状況」だとして、許容上限値を最大 100mSv まで上げるような勧告をするのか (ICRP の Pub103、Pub107 及び Pub111 など)、という疑問が浮かんできます。理由は大きく 2 つあります。1 つは**避難にかかる社会的コストを低く抑えるため**です。たとえば、福島原発事故で年間 1mSv 以上の被曝線量が予測される人々をすべて避難させたとしましょう。(福島事故では 20mSv 以上でした。チェルノブイリ事故で旧ソ連政府は 5mSv 以上を採用しました。これはすべて ICRP の予想被曝実効線量です。この実効線量にもすでにトリックが含まれ、これ自体過小評価を含んでいることはすでに見たとおりです)

年間予想被曝線量 1mSv を空間線量率に換算してみると、0.19µSv/h となります。もしこの数字が適用されるなら、ほぼ福島県全域、茨城県北部、場所によっては埼玉県や東京都の一部も入ってきます。(天候や状況によって空間線量率は大きく変わります) 避難対象となる人口は 400 万人を下らないでしょう。以上は強制避難者です。これに当然自主避難者が大量に発生します。避難にかかる費用は膨大です。しかし数字を年間 20mSv と

すれば、このコストは一挙に圧縮されます。つまり避難基準をあげる狙いは苛酷事故によって生ずる社会的コストの圧縮です。もう 1 つは、**原発や放射能に対する一般大衆の恐怖を軽減**することです。原発産業はアメリカとイギリスでスタートしました。その後経済成長を続ける“西側先進国”で大きく発展しました。しかし原発から普段に放出する放射能、しょっちゅう発生する放射能漏洩事故、それにスリーマイル島事故やチェルノブイリ事故、あるいはフクシマ事故などの苛酷事故発生で先進国では原発を増やせなくなりました。市民が許さなくなったのです。今後期待できるのはロシア、中国など新興国、発展途上国です。これらの国で原発や放射能に対する恐怖が蔓延しては基都都合が悪いのです。かつて「**チェルノブイリ事故はたいしたことはなかった**」と IAEA や ICRP 系の学者・研究者が宣伝したように、「**フクシマ事故はたいしたことはなかったと宣伝しなければなりません。そのためには避難者は少なければ少ないほど都合がよい**」のです。

フクシマ事故以降、政府・民主党、自民党政権が一貫して取ってきた政策は、汚染地区に人々を定住させ、避難者を少なくし、ダメージを小さく見せかける政策でした。**一言でいえば被曝強制政策・被曝受忍政策**といえます。この政策を下支えしたのがこれまで見た放射線被曝の影響を極端に過小評価する ICRP のリスクモデルとその勧告です。

以上が政府・政権、当局が取ってきた被曝強制政策というなら、これを**民間サイドで補強する役割を担っているのが「エートス・プロジェクト」**です。図 2 はエートス・プロジェクトの福島現地における Web サイトのトップページです。「エートス」は秘密でも何でもありません。その性格上 ICRP との密接な関係を堂々と披瀝し、「原子力災害後の福島で暮らすということ。それでもここでの暮らしは素晴らしく、よりよい未来を手渡すことができるということ」と高らかに謳い、その狙いを端的に表現しています。図 1 は同 Web サイトに掲載されている「エートスとは何か」と題するスライドの 1 コマです。「住民が自主性をもって、生活と環境の回復過程に関わっていく活動」「地域に密着した、現実的な放射線防護文化の構築」とその役割を端的に表現しています。「エートス・プロジェクト」とは**住民が自ら進んで被曝受忍をするよう誘う一種の“文化運動”**なのです。エートス・プロジェクトの推進役がフランスの核産業に支援されている民間機関、放射線防護評価研究センター (CEPN) の所長であり、自ら ICRP の第 4 委員会 (ICRP のリスクモデルと放射線防護原則を実際の現場に適用することを主任務とする) 委員長であるジャック・ロシャール氏であることはむしろ当然といえます。

エートスとは何ですか? — 何よりも信頼の構築から —

ETHOS はベラルーシで行われたチェルノブイリ事故後の回復プログラムの名前です。EC (ヨーロッパ共同体) 各国の専門家チームにより、ベラルーシ政府とベラルーシの民間のベルラド研究所と協力して行われました。



住民が主体となって、検査体制と医療体制といった行政のバックアップを背景に、積極的に汚染地内での生活と環境を回復させていく試みです。外部の専門家が上から命令するのではなく、住民が実計測によって不安を解消し、工夫をしながら生きていくプロセスを作り出すのを目標としています。



語源は、ギリシャ語の ETHOS (信頼) 哲学者アリストテレスの「説得のための 3 つの要件」のうちの一つです。

エートスを芯に「できること」 — 自分たちで見つけてゆく —

- ◆ 住民が自主性を持って、生活と環境の回復過程に関わって行く活動。
- ◆ 地域に密着した、現実的な放射線防護文化の構築。

それを「かたち」にして「うごかしてゆく」そのためには…

社会的または法的制約、援助、補償体制等々を考慮し、住民のそれぞれの視点を共有しながら問題に対処することが大事です。

そして、住民自身が自らのおかれた状況を理解し、計測し、自分なりの解釈をする事ができるようになれば…

個人・集団で、放射能汚染への対応をどう改善して行くのかを自分たちで見つけ出し「現実的な放射能との共生」が可能になります。

【資料出典】ETHOS IN FUKUSHIMA の「活動」より資料 PDF 「エートスって何? p 2



【出典】ETHOS IN FUKUSHIMA の web サイト <http://ethos-fukushima.blogspot.jp/>

http://www.inaco.co.jp/hiroshima_2_demo/

第 73 回広島 2 人デモ
2013 年 11 月 8 日 (金曜日) 18:00 ~ 19:00
毎週金曜日に歩いています 飛び入り歓迎です



福島現地の汚染レベル 年間 1mSv の長期目標をかなぐり捨てる 日本政府・自民党政権

There is no safe dose of radiation
「放射線被曝に安全量は無い」世界中の科学者によって一致承認されています。

黙っていたら “YES” と同じ
広島 2 人デモはいてもたってもいられなくなった仕事仲間の 2 人が 2012 年 6 月 23 日からはじめたデモです。私たちは原発・被曝問題の解決に関し、どの既成政党の支持もしません。期待もアテもありません。マスコミ報道は全く信頼していません。何度も騙されました。また騙されるなら騙されるほうが悪い。私たちは市民ひとりひとりが自ら調べ、考えることが、時間がかかっても大切で、唯一の道だと考えています。なぜなら権利も責任も、実行させるかも、委えていくかも、私たち市民ひとりひとりにあるからです。

詳しくはチラシ内容をご覧ください
私たちが調べた内容をチラシにしています。使用している資料は全て公開資料です。ほとんどがインターネット検索で入手できます。URL 表示のない参考資料はキーワードを入力すると出てきます。私たちも素人です。ご参考にしていただき、ご自身で第一次資料に当たって考える材料にしてください。

表 1 福島原発事故における日本政府の避難基準

国際的な考え方	現在の各種線量基準					
	定点測定による線量推定		食品に含まれる放射性物質の濃度による評価	区域設定は空間線量 従業者は個人線量		
線量	国際放射線防護委員会 (ICRP) 勧告	避難	避難指示区域見直し	除染	食品規制 (参考)	事業者 (参考)
100mSv	2007 年勧告以降 ＜事故時の目安＞ ICRP のリスクモデル 100mSv 以下の被ばくでは確定的影響は確認されていない。 確率的影響は 100mSv 以下の被ばくでは他の要因による発がんの影響に隠れてしまうほど小さい	避難指示	帰還困難区域 事故から 6 年経過後も年間 20mSv 超	帰還困難区域 モデル事業として国が除染を実施	食品規制 (参考)	従事者の線量限度 (5 年間の合計値を 100mSv 以下かつ 1 年間の合計値が 50mSv 以下)
20mSv	事故直後 年間 20 ~ 100mSv 緊急被曝状況	避難指示	居住制限区域 事故から 6 年以内に年間 20mSv を下回る	避難指示区域 国が除染を実施 居住制限区域については、生活圏で年間 20mSv 以下となることを目指す	食品規制 (参考)	
1mSv	平時への移行時期 年間 1 ~ 20mSv 現存被曝状況	避難指示	避難指示解除準備区域 現時点で年間 20mSv 以下	避難指示区域以外 市町村が定める計画に基づき除染を実施	食品からの追加の被ばく線量が年間 1mSv を超えないように基準値を設定	敷地境界における線量限度 年間 1mSv
	長期的目標 年間 1mSv (事故後の長期的な目安) 計画被曝状況				【基準値】(放射性セシウム) 一般食品 : 100Bq/kg 乳児用食品 : 50Bq/kg 牛乳 : 50Bq/kg 飲料水 : 10Bq/kg	

【参照資料】原子力規制委員会「帰還に向けた安全・安心対策に関する検討チーム」2013 年 10 月 3 日第 2 回会合 http://www.nsr.go.jp/committee/yuushikisya/kikan_kentou/20131003.html 資料 2 「各種の線量基準 (一覧)」

<次ページに続く>

